

『 禅のころ - 曹洞宗 - 』

ねはんえ
涅槃会

平成29年2月第2週放送

「涅槃会」とは、今からおよそ二五〇〇年前の二月十五日に、お釈迦さまがインドのクシナガラ郊外、沙羅双樹のもとで八十歳のご生涯を終えられたことに因み、その時の様子を描いた涅槃図という絵図を掲げ、お釈迦さまのお徳をお偲びする法要をいいます。

お釈迦さまは、三十五歳でおさとりを開かれてから四十五年間の長きにわたって、自らの足で人々を救う教えを多くの土地で説き弘められました。その旅路の最後に、沙羅双樹のもとで、頭を北に右脇を下にして横になられ、静かな最期を迎えられたのです。

おさとりを開かれてからお釈迦さまは、その内容を他の人々にも解って欲しい、苦しみや迷いから離れて欲しいとの思いから、悩み苦しむその人にぴったりと合った喩えを用いて、時には相手の考えていることまでも察して教えをお示しになりました。これを、対機説法といい、具体的な言葉をもって多くの方々に教えを説かれました。

それに対して、お釈迦さまの涅槃のお姿は、お言葉を発することはありません。

お釈迦さまは、喩えではなくありのままのお姿を見せることで、多くの弟子達をはじめ獣や鳥、虫などの生きとし生けるもの全てに、“この世の中は無常である”、“命には限りがある”という、共通した大きな真実を、その身をもってお示しにされたのです。

涅槃図に多くのさまざまな生きものが描かれているのは、お釈迦さまのその教えを表しているといえるでしょう。

このお釈迦さまのお姿は、私たちが参列するご葬儀の祭壇に見ることができます。それは、お柩の亡き故人であり、その故人のお姿は、お釈迦さまの最期と同じく、全ての迷いを離れた安らかな涅槃のお姿に重ねることができます。

祭壇の一对のお燈明は、私たちの心の迷いや煩惱を照らすみあかしです。

私たちは、すぐ間近で迷いを離れた故人のお姿に接しているのです。このかけがえない教えとの出会いの場で、お通夜ではお釈迦さまがお亡くなりになる間際のお示しをお誦みし、ご焼香する皆様と共に自分自身の命の無常を観じて、足元にあ

『 禅のころ - 曹洞宗 - 』

るべき「おさとの道」を確かめるのです。

ねはんえ
涅槃会にあたり、^{とうと}尊き真理にめざめ、多くのみ教えで人々をお救いになられた
お釈迦さまを偲び、^{のこ}遺された教えを^よ拠り所として、自分自身の生き方をあらためて
見つめる機会としたいものです。

— 終 —